

第4回公開講演会開催される

広報委員 田近 英一（地球惑星科学専攻）

東京大学大学院理学系研究科・理学部が主催する公開講演会が、2003年11月6日、法文2号館31番教室で行われた。これまで、本研究科の教官を中心とした講師の方々に最先端の基礎科学研究を分かりやすく講演していただく、という形式で行ってきた。第4回目を迎える今回は少し趣向を変え、「基礎科学の面白さをどう伝えるか」と題し、講演とパネルディスカッションを通じて基礎科学をめぐる現状について考えよう、という企画にしてみた。

ご承知の通り、現在、基礎科学を取り巻く状況は厳しい。「科学技術」という言葉に象徴されるように、これまでも基礎科学は軽視されがちではあったが、社会の変化や不況を反映して、最近その傾向がますます顕著である。しかし一方で、私たち基礎科学の研究者は社会からの理解を得るための努力をあまりにも怠ってきた、という面も否めない。法人化を来年度に控えたいま、一般の方々とともに、私たち研究者自身が基礎科学をめぐる現状について議論することには意味があるだろう。そんな思いから、今回このテーマを取り上げ、学外の方々をお招きして意見をいただくことにした。

まず、理学系研究科長である岡村定矩教授から、「東大理学部は基礎科学の面白さをどう伝えてきたか？」と題し、本研究科が広報活動にどのように取り組んできたのかをお話いただいた。率直に言って、これまではあまりまじめに取り組んできたとはいえないこと、どちらかというところ一般社会よりもお役所の方を向いていたこと、しかし最近は変化の兆しがあり、2000年以降はかなり精力的に努力を行ってきたこと、などについて述べられた（詳しくは、以下の要約を参照のこと）。

次に、評論家の立花隆氏をお招きして、「基礎科学と応用科学の両方を見てきた人間として」と題し、日本の社会における基礎科学の現状分析をしていただいた。立花隆氏は、いまさら説明の必要もないと思われるが、科学技術を含む非常に幅広い分野で批評活動をなさっておられる。本学の教授を勤められた経験もあり、基礎科学の問題についてもさまざまなメディアで発言されておられることから、今回のテーマに最もふさわしい方と判断し、忌憚のないご意見をいただくことにした。日本は国際的にみて科学・技術に驚くほど関心が低いこと、日本の理科教育の問題、日本の基礎科学研究者を外から見た感想、科学ジャーナリズムの難しさなど、非常に有益なお話を伺うことができた（詳しくは、以下の要約を参照のこと）。

その後、このお二人に加えて、理学系研究科諮問委員の尾関章氏（朝日新聞、科学ジャーナリスト）、前理学系研究科長の佐藤勝彦教授（物理学専攻）、福田裕穂教授（生物科学専攻）、平木敬教授（情報理工学系研究科）をパネリストとしてお招きし、広報委員長の浦辺徹郎教授（地球惑星科学専攻）の司会のもと、パネルディスカッションが行われた。科学ジャーナリズムの難しさ、社会に対する説明責任、大学院生の教育、初等中等教育への関わり、など広範囲にわたる意見が出され、大変内容のある議論が行われた。本研究科として検討に値するような提案もいくつか出された（詳しくは、以下の要約を参照のこと）。

今回の公開講演会には350名以上の参加者があり、会場は熱気に包まれ大盛況であった。アンケート結果をみると、約91%の参加者が非常に面白かったまたは面白かったと回答しており、この問題に対する関心の高さがうかがえる。また、今回の参加者の約44%は学生（大学院生、学部生、高校生）であり、若い世代に積極的に参加していただけたことは大変良かったと思う。パネルディスカッション方式は好評であったので、今後もテーマによってはこのようなやり方で「生の議論」を行うのが良いだろう。ただし、今回に関しては、そうそうたる顔ぶれのパネリストとテーマの重大性を考えると、やはり時間が足りなかったと言わざるを得ない。折りをみて、またぜひこの問題を取り上げ、違った角度から議論することができれば、と思う。